

小学校体育科「表現運動系」における「ダンス」導入の経緯に関する史的検討——戸倉ハルと松本千代栄のダンス観を中心として——

北村桜

本発表の目的は、現在の体育科「表現運動系」が目指すダンス観を明らかにし、歴史的な文脈からみた「創作」による「ダンス」のありようを新たに位置づけることである。そして、「ダンス」の前身である「唱歌遊戯」がなぜ「既成作品」の「教え込み」として捉えられたのか、どのような部分が「ダンス」として認められなかったのかについて解き明かしていく。

従来の研究では、1947年『学校体育指導要綱』によって、体育は「遊戯」から「ダンス」へと転換したことが明らかとなっている。そして、戸倉ハル(1896 - 1968)が提唱した「遊戯」は、松本千代栄(1920 - 2022)による「ダンス」によって否定されたという解釈であった。しかし、戸倉と松本それぞれのダンス観に遡ってまで、律動的な表現を重視する「遊戯」と、自由な表現を行う「ダンス」としての比較はなされてこなかった。

本研究の手順は、1936年『学校体操教授要目』、1941年『学校体操指導要領』の改正審議委員であった戸倉ハルと、1947年『学校体育指導要綱』の要目委員であった松本千代栄のダンス観を検討する。この2人は、日本の体育科におけるダンス研究者として知られ、現在における「創作」による「ダンス」の土壌を築いた人物である。

本研究の資料は、東京女子高等師範学校研究科時代の戸倉の文献や、奈良女子高等師範学校附属小学校訓導時代の松本による指導記録を用いる。戸倉においては、彼女が創作した「唱歌遊戯」の作品や、子供用のダンス作品を創る教員に向けて発表された論文等を扱う。松本においては、舞踊学会での原著論文や、奈良女子高等師範学校附属小学校訓導の際に記された指導記録を扱う。両者のダンス観が記された資料を扱い、どのような実践を行っていたのか、またどのようなダンス教育を目指していたのかについて検討する。

本研究の結論は、松本は「創作」を位置づけながらも、「動きのけいこ」として基礎的な学習を設定していたということである。すなわち、表現のための技能を必要としていたのである。そのため、「既成作品」を「創作」のきっかけとして子供の前で見せることは許容している。つまり、彼女は戸倉の「遊戯」そのものを批判したのではなく、「遊戯」の「教え込み」一辺倒になることを批判したのである。したがって、松本は「動きのけいこ」によって基本的な身体感覚に気づくことと、そこで醸成された基礎の上で「創作」することの二本柱による「ダンス」を説くのである。